めていたのであるが、その傍にあみだの杉と称される大樹あり、その樹下にだるま堂なる安産信仰の御堂があったので、汶水は己の教えをだるま様のおつげだとして本書を記述し自己出版本として、だるま堂の礼祭の時に参詣人に配布したのである。その版木は江戸の一流の職人によって彫られたもので五十嵐家に保存されていたが、演者が昭和四十九年これを版ずりした直後に焼失し、現在残存のものが仙台市博物館に所蔵されている。本書は以上の如き理由からあまり多く現存しておらず、演者の刷った一部の他は、慶応医学部図書館に一部あるのみである。

なお五十嵐家は代々産婦人科医として名声つづき現在四代目の五十嵐章氏が仙台市において産婦人科を開業している。また祖母にあたる五十嵐とまを刀自は長年にわたって産婆を開業しその傍学校を経営して功績あり叙勲の栄に輝いた方である。

（仙台医学史研究会）

富士川游博士の思い出

田中助一

富士川游博士は昭和十五年（一九四〇）十一月六日に数え年七十六歳で逝去せられたので、昭和六十一年は四十六年目に当る。

博士は昭和二年十一月に発会した日本医史学会の生みの親であり、また育ての親でもあるが、三代目の理事長で、十三年十一月からであり、現在の会員の中には御存知ない方も相当あることと思われる。今回は博士の御出身地である広島において第八十七回総会が開催せられることとなったので、博士の御人柄を御参考までに話してみたいと思う。

私が初めて博士にお眼にかかったのは、昭和六年春日本大学医学科二年生の時であった。郷里の山口県萩市で、中学校時代に地歴を習った旧師香川政一先生から、「防長医学史」の研究をすすめられ、「東京には日本医学史という

立派な本を著わされた富士川博士が居られるので、話を聞きに行きなさい」と言われた。それで新聞を見ると、中山文化研究所の所長をして居られることがわかったので、麹町区内幸町二丁目にあった東拓ビル四階の研究所に行った。紹介状も何も持たずに行ったので、会って下さるかどうかわからない不安があったが、予想に反して博士はすぐ御引見下され、テーブルの上に置かれたとじ糸が切れてバラバラになった「日本医学史」をめくりながら、気さくに山口県関係の名医数人の話をして下さり、「毎月例会を開いているので、都合が良かったらいらっしゃい」と申され、それから毎月通知が来るようになり、自然に入会することとなり、今日まで続いているのである。

博士は何時も控え目で、あまり能弁ではなかったが、先賢の話をなさる時には、じゅんじゅんとして話され、聞く者に深い感動を与えられた。時には眼に涙をたたえて居られることもあった。

九年三月に卒業することとなったので、色紙を二枚持参して座右の銘の揮毫をお願いしたところ、一年経って頂戴した。白色紙の方には博士が尊敬して居られた前野蘭化の語（経営漫費人間力、大業全依造化功）が書いてあり、もう一枚の朝鮮色紙の方には菜根譚の中の語（静中静非真静、動処静得来纔是性天之真境、楽処楽非真楽、苦中楽得来纔見心体真機）が書いてあった。

十三年四月に第十回日本医学会が京都で開かれ、第一分科会である日本医史学会は、第三高等学校が会場であった。開会前日の午後会場を下見に行って見たら、博士が展示資料を並べて居られたので、しばらくお手伝いした。

十四年秋幕末長州藩の名医青木周弼の顕彰会が結成せられ、私は伝記編纂を委嘱せられた。翌十五年三月四日恒例の医家先哲追薦会が東京府医師会館で開催せられることとなったので、資料展示コーナーの一部に青木周弼・研蔵兄弟の資料を展示させていただいた。当日は特別講演に東大教授文学博士宇野哲人氏が老子の話をせられる予定であったが、定刻を過ぎても来られず、待ちぼうけを受けた会員間にも不平の声が出たので、富士川・藤浪両博士御相談の結果、私に穴埋め話をすることを仰せつけられた。そこで私は原稿なしで、青木兄弟のことを約三十分間話して、ようやくその場を切り抜けることが出来た。

青木周弼伝は十五年七月に脱稿したので、私は開業のため萩に帰った。会の方ではかねての予定通り原稿を持参して校閲をお願いすることになっていたが、博士が御発病になったので不可能となった。

博士は大正八年十月萩に来られて、医師会館と真宗の妙元寺において講演を行って居られるが、多分その時揮毫なさったものと思われる掛軸を、終戦後西福寺という真宗寺院で見たことがあり、博士に再会したようななつかしさを感じた。

更に四十七年四月二十三日に、毛利元就の居城地である吉田の郡山城跡を訪れたところ、幕末の有名な眼科医土生玄碩の顕彰碑が郡医師会により建てられており、その碑陰の文は博士の揮毫であった。

その後広島の地にも博士の顕彰碑が建てられたり、著作集が刊行せられたりして、博士の御功績が再認識せられるようになったことはまことに喜ばしいことである。

（萩市・開業）

本邦ハンセン病史における後藤昌文・昌直先生父子の業績

佐久間温巳

ハンセン病（以下、ハ病と略す）は古くから世界各地にあった疾病の一つで、我国でも古代より存在したことは二、三の古書で明らかであり、本症患者の救済に関しては、奈良時代の光明皇后、鎌倉期の忍性律師などの事績、永続しなかったが戦国末期からの来日宣教師による活動などが広く知られている。しかし、本邦ではハ病は遺伝病、血統病として嫌忌され、更に不治の疾病とされて治療されることもなく、肉親からも見放され、やむなく各地の温泉場や霊場をさまよう悲惨な生活を余儀なくされた患者が多かった。

明治以降のハ病患者救済、救療の活動は、高島氏によると大凡二十年の期間を画して変化してきたという（「国立療養所史〈らい部〉」）。明治四十年最初のハ病予防法である法